

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：24403  
 研究種目：基盤研究(C) (一般)  
 研究期間：2013～2015  
 課題番号：25370297  
 研究課題名(和文)ウィリアム・フォークナーと「老い」の表象  
  
 研究課題名(英文)William Faulkner and the Representation of Aging  
  
 研究代表者  
 相田 洋明(Soda, Hiroaki)  
  
 大阪府立大学・人間社会学部・教授  
  
 研究者番号：70196997  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：研究代表者・研究分担者を中心とする「ウィリアム・フォークナーと老いの表象」研究会を研究期間中に14回開催し、当該テーマについて様々な角度から検討した。そしてその議論をもとに共同論集『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』(松籟社)を2016年2月に出版し、相田洋明は『土にまみれた旗』におけるフォークナーの曾祖父像、梅垣昌子は『行け、モーセ』を中心にした狩猟物語における「老い」のあり方、金澤哲は「あの夕陽」『アブサロム、アブサロム!』から『寓話』に至るフォークナーの全キャリアにおける「老い」のテーマの意義と重要性、松原陽子は『墓地への侵入者』における老人表象を論じた。

研究成果の概要(英文)：The Principal Investigator and the Co-Investigators organized with other Faulknerians the “Representation of Aging and William Faulkner” research group and met 14 times during the study period and discussed the theme from various viewpoints. We published William Faulkner and the Representation of Aging (Shoraisha) in February 2016 on the research and discussion. In the book, Hiroaki Soda analyzed the image of Faulkner’s great-grandfather in *Flags in the Dust*, Masako Umegaki aging and identity in Faulkner’s hunting story in *Go Down, Moses*, Satoshi Kanazawa the importance and possibility of the theme of aging in Faulkner’s career from “That Evening Sun” and *Absalom, Absalom!* to *A Fable*, and Yoko Matsubara the representation of old men / women in *Intruder in the Dust*.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：フォークナー 老い 表象 レイト・スタイル アメリカ南部文学 アメリカ南部 アメリカ文学 アメリカ文学史

### 1. 研究開始当初の背景

アメリカ文学研究において、「エイジング・スタディーズ」は、ジェンダー・スタディーズを中心とする社会学的知見との学際的研究によって、近年活性化している新しい研究領域である。

1980年代頃からフェミニストたちの間で、「老い」とジェンダーならびに創造性の関連への関心が高まった。それは、「性」を生物学的決定論から切り離したジェンダー・スタディーズの必然的発展であり、「老い」を生理学的概念から切り離し、社会的に構築されたものとして捉える発想から生まれたものである。その結果、性や人種が、生物学的属性ではなく社会的・文化的構築物であるのと同様に、「老い」も、特定の社会や文化の中で構築され、イデオロギーによる政治的側面を付加されたものであることが認知された。

アメリカ文化が、その歴史的経緯から、「若さ」「未来」「無垢」に価値をおくことは周知のことだが、それは同時に「老い」や「老人」を隠蔽し周縁化する傾向を助長した。それゆえ、性や人種に関わる言説と連動させながら「老い」を批判的に考察することは、アメリカ文化の本質をこれまでにない視点から切り出すことになる。

このような新たな関心から、文学研究の分野でも、90年代以後「老い」をテーマにしたアンソロジーがいくつか出版されたほか、論文集 *Aging and Gender in Literature* (1983) が刊行され、ジェンダー・スタディーズに刺激を受けた「エイジング・スタディーズ」の基礎が築かれた。以後現在まで、キャスリーン・ウッドワードらの研究を含め、アメリカ文学における「エイジング・スタディーズ」は着実に進展している。

一方、日本でのアメリカ文学・文化研究における「老い」に関わる研究状況であるが、学会におけるこの分野の最初の取り組みは、1998年の日本英文学会第70回全国大会におけるシンポジウム「現代アメリカ小説と『老い』」であった。このシンポジウムは上記のようなアメリカでの展開を受けて企画されたものであり、新しい研究分野としての「エイジング・スタディーズ」を日本でも確立しようとするものであった。以後、この分野の日本での研究状況は必ずしも活発であるとは言えなかったが、上記シンポジウムの10年後の2008年、日本アメリカ文学会関西支部では、第52回関西支部大会において、本研究分担者金澤を司会者とするフォーラム「アメリカ文学における『老い』の諸相」を開催し、この分野における研究をさらに発展させようと試みた。さらに2012年には、このシンポジウムを基に『アメリカ文学における「老い」の政治学』（金澤哲編著、松籟社）が刊行された。さらに同書をきっかけとして、2013年には日本ヘミングウェイ協会の会員による『ヘミングウェイと老い』（高野泰志編著、松籟社）が出版された。

### 2. 研究の目的

上記のように、アメリカ文学における「エイジング・スタディーズ」は確実な発展の緒についたところであり、今後の発展が十分期待される新分野である。

本研究はヘミングウェイと並び称される作家ウィリアム・フォークナーの作品を対象とし、作家自身の「老い」や作品中に描かれた「老い」の表象を分析することによって「エイジング・スタディーズ」をさらに発展させていこうとする試みである。

フォークナーは南北戦争以前から20世紀までの南部の歴史を背景に、ジェンダー・人種・階級を深く問題化した作品群ヨクナパトファ・サーガを長年にわたって書き続けた作家であり、「老い」の視座から分析するのに、これほど相応しい作家はいない。フォークナー研究はこれまでジェンダー・人種・階級の3つの観点から主として深められてきたが、「老い」は、これらの3つの観点のいずれとも深く関わるとともに、時間による普遍的・不可避的变化という性質において、これらを動揺させ流動化させる可能性を秘めている。言い換えれば、「老い」は上記3点に時間性を導入することによって、それらを固定的にとらえがちである傾向を打破し、フォークナー研究に新たな地平を開く可能性をもっているのである。

本研究は、「ジェンダー・階級・人種」を深く問題化しているフォークナーのテクストを題材に、「老い」の視座の開く可能性を実証することにより、アメリカ文学研究における「エイジング・スタディーズ」をさらに発展させ、独創的な領域を開こうとするものである。

### 3. 研究の方法

本研究においては、アメリカ南部社会の政治的・文化的状況を参照した伝記的な考察と作品群全体における人物像（「老人像」）の検討を通して、特にジェンダー・人種・階級に注目しながら、フォークナーの生涯・作品の双方における通時的な「老い」の表象を解明する。さらに、『行け、モーセ』（1942）や『墓地への侵入者』（1946）という中後期の代表作を「老い」の視点から徹底的に研究することで、フォークナーにおける「老い」の具体像をさらに探究する。また、伝記研究、エスニシティ理論、文学批評理論、社会・文化批判など多様な方法を援用しながら、フォークナーと「老い」の表象の研究が、これらの方法に与える新たな視点について考察する。

そのために研究代表者・研究分担者を中心にさらに関西・中京地区在住のフォークナー研究者を加えて「フォークナーと老いの表象」研究会を発足させ、年3回～4回研究会を開催する。そして研究の総仕上げとして最終年度には「フォークナーと老いの表象」をテーマにした研究書を出版する。

#### 4. 研究成果

研究代表者・研究分担者にさらに5名のフォークナー研究者を加えて「フォークナーと老いの表象」研究会を組織し、2013年度に5回、2014年度に3回、2015年度に6回研究会を行い、当該テーマに関して議論を行った。

また、上記研究会のメンバーを執筆者とする研究論集『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』（金澤哲編著、松籟社）を2016年2月に出版した。

さらに具体的に記せば、研究代表者相田洋明は、フォークナーの曾祖父ウィリアム・C・フォークナー（1825-1889）の波乱に満ちた生涯と、その5つの作品『メキシコ戦争に材をとった長編詩『モンテレーの包囲』（1851）中編ロマンス小説『スパニッシュ・ヒロイン』（1851）ミシシッピ川を行く汽船「白い薔薇」号船上を舞台としたミステリー仕立ての長編小説で当時のベストセラーとなった『メンフィスの白い薔薇』（1881）南部人の「私」が旅先の北部で出会った老人から独立戦争時代の悲恋の話をかきといた設定の長編小説『れんが造りの小さな教会』（1882）マーク・トウェインの『赤毛布外遊記』を意識したヨーロッパ旅行記『ヨーロッパ駈足漫遊記』（1884）』に関して発表を行ったのち、『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』に論文「ウィリアム・C・フォークナーとジョン・サートリス『土にまみれた旗』における作家としての曾祖父像の不在とその意味」を執筆した。

当該論文において相田は、ヨクナパトーフ・サーガ全体を支配することになるジョン・サートリスのモデルとして曾祖父ウィリアム・C・フォークナーをフォークナーは『土にまみれた旗』（1929）で用い、細かな点まで曾祖父の事績をたどったが、唯一作家としての曾祖父像を意識的に徹底的に排除したことを指摘し、その排除のなかに古い/老いたアメリカ南部の南部ロマンスを否定し、地域的な作家ではなく普遍的な作家たらしとした若きフォークナーの意志を読み取った。さらに、後の短編「女王ありき」（1933）でフォークナーは曾祖父と曾祖父が体現する南部ロマンスを受入れ、後のフォークナーの作品には旧南部文学の影響が読み取れることを論じた。

あわせてフォークナーの詩人から小説化への転身に大きな影響を与えた妻エステル作品についても研究を行い、学会発表と論文執筆を行った。

研究分担者梅垣昌子の最終的な成果は、『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』に収録された論文「狩猟物語の系譜と老いの表象—『行け、モーセ』を中心に」にまとめられた。この論文においては、フォークナーの作品群における狩猟物語に注目し、その中心に『行け、モーセ』を据えた。そのうえで、フォークナーが提示した「老い」の二つの姿

を分析したものである。作品分析の過程で浮き彫りにされる「老い」の異なる方向性を明らかにするとともに、フォークナー自身の老いの問題へと議論を広げ、作家のトポスと関連づけつつ、普遍的な視野から「老い」の受容のあり方を探ることで、フォークナー研究に新たな可能性を切り開いた。特に、これまであまり重要視されてこなかった狩猟物語の系譜をたどることによって、フォークナー自身の老いの受容を考察した点は、地球規模の環境問題や高齢化社会の問題と文学との接点に関わる新しい地平の開拓につながるものとして、今後の研究のひとつの指針となる。

上記の論文執筆の準備にあたり、「老い」の表象につながる幅広いテーマでの口頭発表や論文執筆を行うと同時に、国内外の学会に参加し、またフォークナーと関係の深いミシシッピ大学のアーカイヴズおよびミズーリ州のフォークナーセンターにおいて資料収集に携わった。上記論文の第一章「老いの受容—フォークナーの遺言書」に関しては、2014年7月、ミシシッピ大学で開催されたフォークナー・カンファレンスに出席して、研究分担者をはじめとするフォークナー研究者の研究発表や講演を聴講すると同時に、同大学に所蔵されている資料および、サウスイースト・ミズーリ州立大学に保管されているフォークナー自身の遺言書を実際に参照して、議論の組み立てを行った。また同論文の第二章と第三章については、2013年5月および6月の口頭発表において、フォークナーの「老い」とトポスとの関わりについて論じ、『行け、モーセ』に含まれる「デルタの秋」を通して、老いのふたつの姿を取り上げた。さらに2014年2月には、フォークナーの作品における荒野と人間の営みは密接に関係することから、ミシシッピ・デルタの開発と荒野の縮小をコインの両面と捉え、より大きなスケールで老いの問題を考察すべく、デルタの変容に着目した論文を発表した。最後に、同論文の第四章および論文全体の方向性を確認するため、同論文の構想と議論の細部について、2015年2月に口頭発表を行った。

研究分担者金澤哲は、編著『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』をまとめ、「老い」という新しいテーマによる共同研究の成果をまとめ、フォークナー研究に新しい局面を開くことに成功した。

具体的には、上記編著冒頭の論文「序に代えて—フォークナーにおける「老い」の表象」を執筆し、フォークナー初期から後期にいたる「老い」の表象を概観し、その変遷をただおった。結果として、フォークナーにとって「老い」が全創作歴を通じて重要な意味を持つテーマであることを示すとともに、フォークナーにとって「老い」の意義は必ずしも一定ではなく、作家としての成熟とともに変化したことを証明した。

フォークナー初期において、「老い」はペ

ルソナの一つであり一種のポーズに過ぎない。だが、このテーマは「時間」の主題と接続することで社会的な意義を獲得し、フォークナーが手に入れることのできなかった「旧南部」を表すメタフォーの一つとなると同時に、若きフォークナーが抱えていた周囲の社会および性からの疎外を表現するものとなる。

この展開を端的に表しているのが、「あの夕陽」、『響きと怒り』、『アブサロム、アブサロム!』の中心人物であるクエンティン・コンプソンである。彼は周囲の社会および性から疎外されるあまり「現在」を目にしながらか「過去」を見るような語り手である。特に『アブサロム、アブサロム!』において、その語りは彼を逃げ道のない袋小路へと追いやってしまうが、その苦境は同作品結末における彼の老いの感覚の告白によって通説に表現されている。

一方、『寓話』の元帥は周囲の社会および性からの疎外を政治的にとらえなおし、彼の並ぶものない権力の源泉としている。後期フォークナーを特徴付けるのは政治への積極的な関与であるが、ここでフォークナーは「老い」の政治的可能性を探究したとすることができる。それは 1950 年代の文学状況と連動し、この作品においてフォークナーはいわば「老い」のポストモダニズムと呼べるような独特の空間を切り開いている。

このように「老い」は作家フォークナーの変遷を反映する重要なテーマであり、またモダニズムからポストモダニズムへと移っていく文学史とフォークナーの作家経歴を結びつけるものである。本論文ならびに上述の編著を編集することにより、フォークナー研究に新局面を開くとともに、「老い」に注目する文学研究をさらに発展させることができた。

研究分担者松原陽子は、フォークナー「後期」作品群の端緒となる『墓地への侵入者』(1948)を、特に冷戦の歴史的文脈において考察することによって、作家の「老い」観を明らかにするとともに、「若さ神話」の上に成り立ってきたアメリカ国家の「加齢化」についても考察することを目指した。平成 26 年夏には、アメリカ・ミシシッピ州で開催された「フォークナーと歴史」を大会テーマとするフォークナー・カンファレンスに参加し、主に第二次世界大戦後の南部に関する情報および資料収集を行った。なお、同年 12 月に日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラム「第一次世界大戦とアメリカ文学 戦争、作品、作家の力学」において行った口頭発表「フォークナーの描く「失われた」戦争」も、この成果の一部である。

主たる研究成果は、論文「第二次世界大戦後のアメリカの不協和音 『墓地への侵入者』における「古き老いたるもの」の介入」として『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』において発表した。この論におい

て、まず、執筆時に 50 歳となっていた作家の老いの意識が、すでに 40 歳代後半から形成されていたことを当時の書簡から明らかにした。その上で、作品内における老人表象の分析を通して、老いがある種のジェンダーフリー状態として描かれていることに注目し、老い逆手に取り、社会規範にとらわれない個人の行動主体を確保しようとする作家の「老いの戦略」を読み取った。さらに、この小説に多分に含まれる当時の連邦政府による公民権政策に反発する政治的発言を、冷戦構造という歴史的文脈の中で読み直すことによって、国家としてのアメリカの老いについても論じた。小説の中で展開される北部批判は、ソ連に対抗して「自由」を掲げる国家戦略とは相容れない保守的で偏狭なものであるが、その批判から、「後進的」で「老いた」南部をスケープゴートにすることによって、「リベラル」で「若い」自国のイメージを保ってきたアメリカ国家の老獪さが読み取れることを指摘した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

金澤哲、フォークナーの戦争観の変遷について、フォークナー、査読有、17 巻、2015、13-32

梅垣昌子、「あの夕陽」とデルタの変容 フォークナーのブルース、名古屋外国語大学紀要、査読無、46 巻、2014、125-146

Satoshi Kanazawa、A Legend of an Unknown Soldier: William Faulkner's *A Fable*、Cornucopia、査読有、24 巻、2014、1-12

金澤哲、クエンティン・コンプソンの「老い」、立命館文学、査読有、634 巻、2014、31-41

相田洋明、エステル「星条旗に関わること」、エステルとフォークナーの「エリー」 エステルの作品がフォークナーに与えた影響に関する一試論、フォークナー、査読有、15 巻、2013、127-134

〔学会発表〕(計 14 件)

相田洋明、ウィリアム・フォークナーの曾祖父ウィリアム・C・フォークナー作品研究 『メンフィスの白い薔薇』と『れんが造りの小さな教会』を中心に、日本アメリカ文学会関西 9 月支部例会、2015 年 9 月 5 日、神戸女学院大学(兵庫県西宮市)

相田洋明、エステル・フォークナー作品研究: 「ドクター・ウォレンスキー」、「渡航」、「星条旗に関わること」 フォークナーの妻エステルがヨクナパトーフア・サーガに与えた影響について、京都大学大学院人間・環境学研究科水野尚之研究室主催講演会、2015 年 3 月 3 日、京都大学(京都府京都市)

梅垣昌子、狩猟物語の系譜と老いの表象:

『行け、モーセ』を中心に、2014年度第3回「フォークナーと老いの表象」研究会、2015年2月15日、中京大学（愛知県名古屋市）

松原陽子、フォークナーの描く「失われた」戦争（フォーラム「第一次世界大戦とアメリカ文学 戦争、作品、作家の力学」）、日本アメリカ文学会関西支部12月例会、2014年12月6日、関西学院大学（兵庫県西宮市）

金澤哲、フォークナーの4つの戦争（シンポジウム「フォークナーと戦争」）、日本フォークナー協会第17回全国大会、2014年10月3日、藤女子大学（北海道札幌市）

Satoshi Kanazawa、Between Allegory and History—Reading William Faulkner's *A Fable*、Faulkner and Yoknapatawpha Conference、2014年7月23日、ミシシッピ州オックスフォード（アメリカ合衆国）

金澤哲、50年代のフォークナーに見る虚像と実像、2013年度第3回「フォークナーと老いの表象」研究会、2013年12月21日、中京大学（愛知県名古屋市）

Satoshi Kanazawa、A Legend of an Unknown Soldier: William Faulkner's *A Fable*、Bio-Kyowa Scholar Public Lecture、2013年11月6日、ミズーリ州ケーブジラード（アメリカ合衆国）

金澤哲、クエンティン・コンプソンと「古い」のモダニズム、2013年度第2回「フォークナーと老いの表象」研究会、2013年9月28日、中京大学（愛知県名古屋市）

梅垣昌子、フォークナーの「あの夕陽」成立事情とデルタの変容、アメリカ文学会中部支部6月例会、中京大学（愛知県名古屋市）

相田洋明、William C. Faulkner (1825-1889)の生涯と作品、2013年度第1回「フォークナーと老いの表象」研究会、2013年5月18日、京都府立大学（京都府京都市）

梅垣昌子、「デルタの秋」と「あの夕陽」における「古い」の表象、2013年度第1回「フォークナーと老いの表象」研究会、2013年5月18日、京都府立大学（京都府京都市）

金澤哲、フォークナー作品に見る「老人」たち概観、2013年度第1回「フォークナーと老いの表象」研究会、2013年5月18日、京都府立大学（京都府京都市）

松原陽子、南部における「成長」と「古い」、2013年度第1回「フォークナーと老いの表象」研究会、2013年5月18日、京都府立大学（京都府京都市）

〔図書〕(計1件)

金澤哲、相田洋明、梅垣昌子、松原陽子、森有礼、塚田幸光、田中敬子、山本裕子、山下昇、松籟社、ウィリアム・フォークナーと老いの表象、2016、265 (11-50、51-72、157-190、191-213)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

相田 洋明 (SODA, Hiroaki)

大阪府立大学・人間社会学部・教授  
研究者番号：70196997

### (2) 研究分担者

梅垣 昌子 (UMEGAKI, Masako)  
名古屋外国語大学・外国語学部・教授  
研究者番号：60298635

金澤 哲 (KANAZAWA, Satoshi)  
京都府立大学・文学部・教授  
研究者番号：70233848

松原 陽子 (MATSUBARA, Yoko)  
武庫川女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：70515642